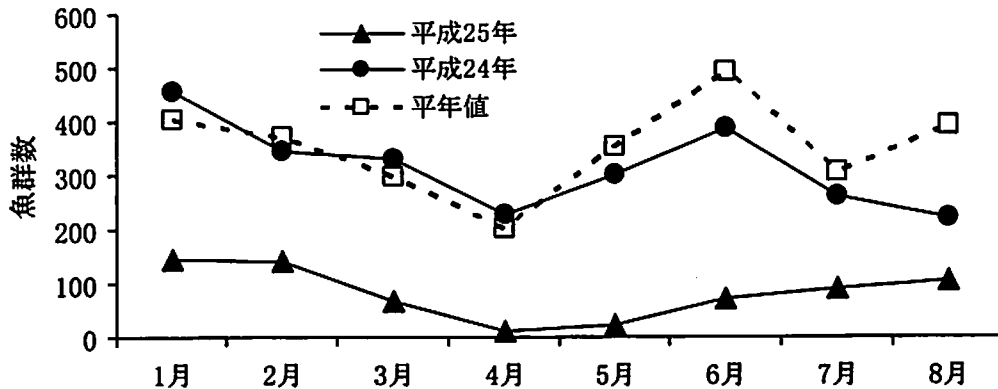


今年のアユ資源状況と資源維持対策について

1. 今年のアユ資源状況

(1) アユ魚群数

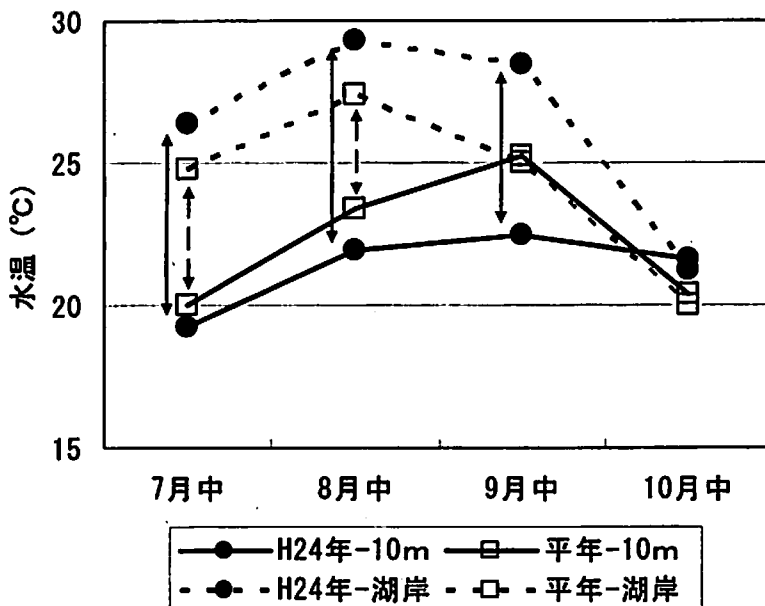


・平年比は、1月 36%、2月 38%、3月 22%、4月 6%、5月 7%、6月 14%、7月 30%、8月 27%。

◆ 4月以降、増加傾向にあるものの、資源水準は平年比2.0%程度となっている。

2. 昨秋のアユ産卵量減少要因と今年の状況について

(1) 琵琶湖表層と下層の温度差の拡大(昨年)

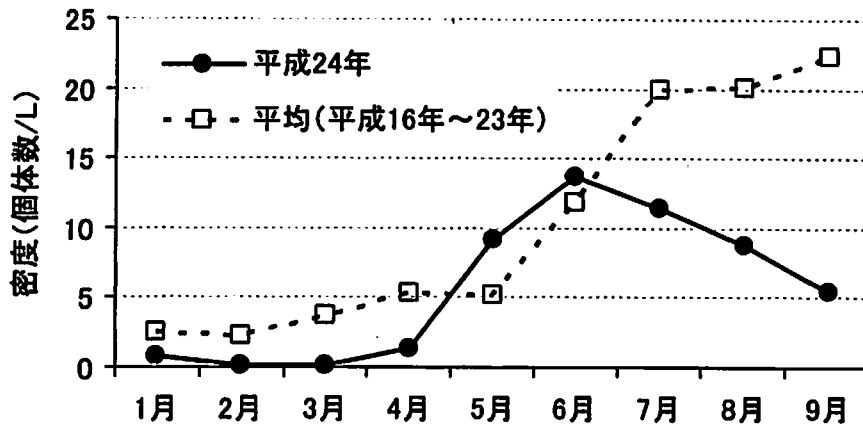


・湖中と湖岸域(河川)で平年以上の水温差が存在し、これが遡上に対する障壁となった可能性がある。

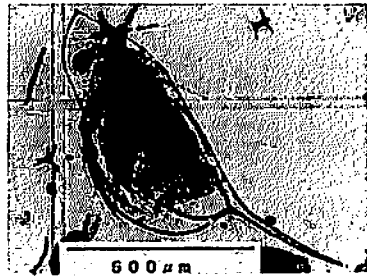
・今年のアユの生息層(水深10m)の水温は平年より1.6℃高く(8月)、昨年のような水温差は心配ない(昨年は平年より1.5℃低かった)。

(2) アユの餌となる動物プランクトンの不足

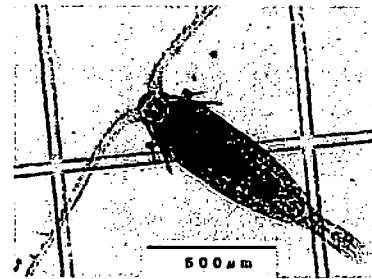
① 昨年の動物プランクトンの生息密度



- ・ 1～4月にミジンコ類（カプトミジンコ、ケンミジンコ等）が少なかった。
- ・ 7～9月にかけて例年なら増加する動物プランクトンが少なかった。



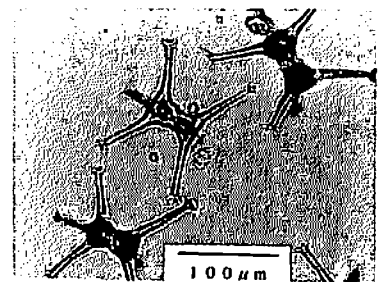
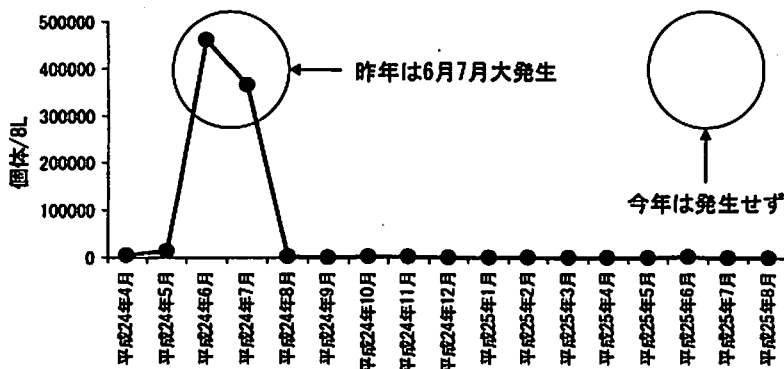
カプトミジンコ



ケンミジンコ

◆ 成長不良のアユが、水温障壁で河川にスムーズに遡上できず、河口周辺で待機している間に、餌不足や体力不足、捕食によって減耗したことが一つの要因ではないかと考えられる。

② スタウラスツルムの発生状況

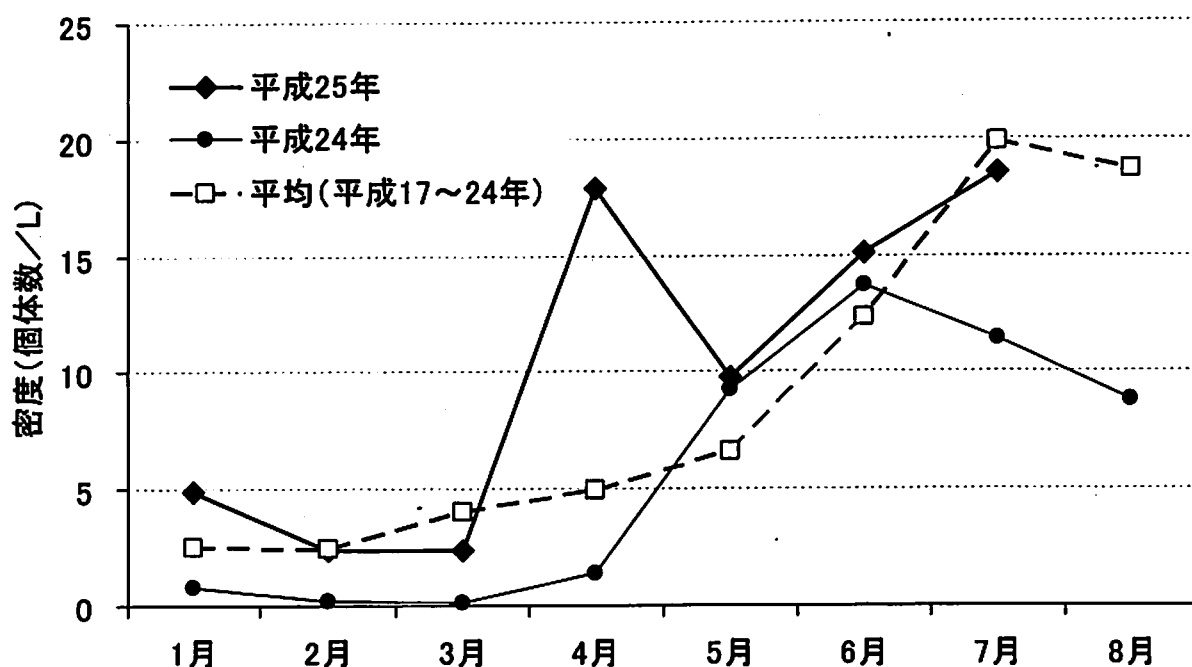


スタウラスツルム

- ・ 動物プランクトンが減少した原因として、6月から7月に動物プランクトンの餌となりにくい植物プランクトン(スタウラスツルム)が大増殖したことが指摘されている。
- ・ この時期にスタウラスツルムが大増殖したのは、30年以上にわたる観測で初めてである。
- ・ 今年はスタウラスツルムの大増殖は観測されていない。

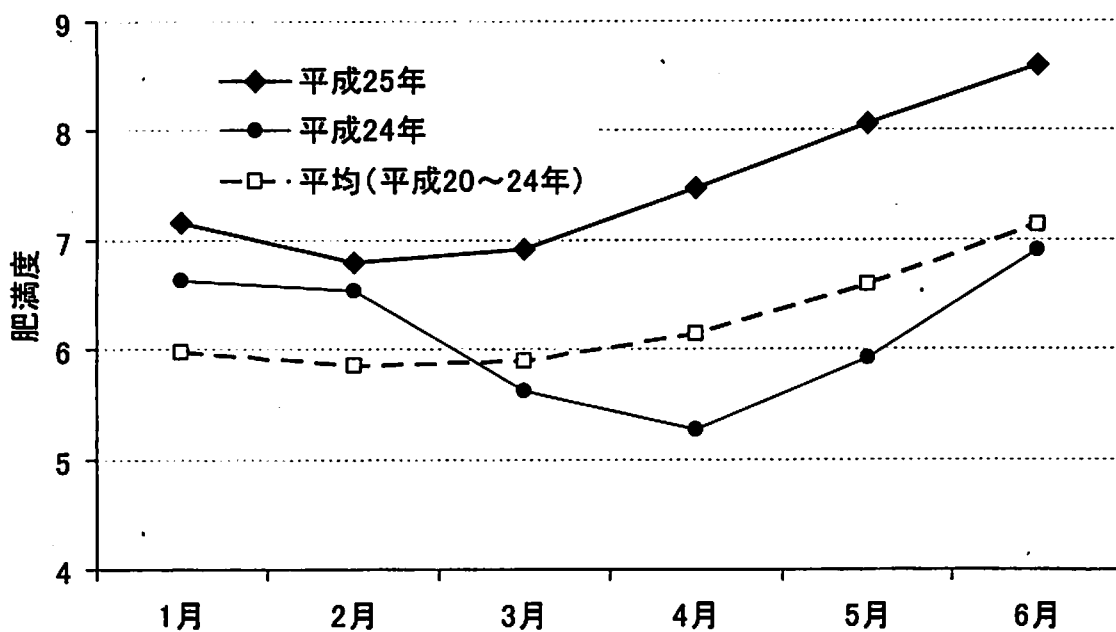
(写真はすべて滋賀県琵琶湖環境科学研究センターHPより)

③今年の動物プランクトンの生息密度



・4月は平年を大きく上回ったが、その他の月はほぼ平年並みで推移している。

④エリで漁獲されたアユの肥満度の推移



・今年には肥満度が高く推移し、アユの栄養状態は良好と思われる。

◆今年には、水温障壁、餌不足、体力不足の心配は小さいが、親アユ資源は少ない。

3. 資源維持対策

(1) 追加対策

親魚放流量と予算額

	当初予算	追加対策	合計
安曇川人工河川へ放流する親魚量	8+5トン	10トン	23トン
姉川人工河川へ放流する親魚量	4トン	取りやめ	0トン
総親魚量	17トン	10トン △4トン	23トン
予算額(千円)	36,916	16,410 △1,660	51,666

- ・安曇川人工河川へ放流する養成親魚量を当初予算の13トンに10トン追加して23トンとする。
- ・アユ資源が平年の20%程度と非常に少ないため、天然親魚の確保が困難であると予想されることから、天然親魚の姉川人工河川への放流を取りやめる。

(2) 事業効果

天然河川流下量(見込み)	45億尾	(平年の20%)
人工河川流下量(当初予算)	26億尾	(13トン×2億尾)
人工河川流下量(追加対策)	20億尾	(10トン×2億尾)
総流下量	91億尾	
期待漁獲量	546トン	

- ◆期待漁獲量546トンは、ここ20年で極端な不漁でない最低の553トン(H23)が漁獲される資源水準となる。